

# ムスリム外交官が見た近世スペイン

— アラウィー朝外交使節の記録から —

押尾高志

## 1 はじめに

### 1.1. アラウィー朝と近世ヨーロッパの関係

16世紀後半からモロッコ地域を支配していたサアド朝は、アフマド・マンスールの治世に最盛期を迎え、サハラ以南のソンガイ帝国を征服して最大版図を築くに至った。しかし、1608年にアフマド・マンスールが没すると、王位継承争いが勃発し、その混乱は17世紀なかばで続いた。このような混乱の中で、アラウィー朝が台頭し、ムーレイ・ラシードの時代にはフェス（フェズ）やマラケシュといった重要都市を掌握し、サアド朝に代わって最終的にモロッコ地域の支配王朝の座についた。

アラウィー朝の支配がモロッコ地域全体におよんだとはいえ、地中海および大西洋沿岸部に位置する主要な都市は、16世紀以来そのほとんどがスペイン・ポルトガル両国の支配下にあった。ムーレイ・ラシードの跡を継いでスルタンとなったムーレイ・イスマーイール（在位1672～1727）は、国内行政の整備および、黒人奴隷軍（ブハーリー軍団）を組織して軍事力の強化を行い、オスマン帝国領アルジェリアへの介入や、スペイン・ポルトガルに支配された沿岸諸都市の奪回へと乗り出した。大西洋沿岸部に位置するアラライシュ（ララーチェ）も、その一つで同市は1610年以来スペインの支配下にあったが、ムーレイ・イスマーイールによって1689年に奪回された<sup>1)</sup>。この際に生じたスペイン側の捕虜の扱いについて、スペインとモロッコ両国は外交交渉を持ち、最終的



図1 スペインとモロッコ 押尾2021より作成

にモロッコに留め置かれたスペイン側の捕虜と、スペイン国内に勾留されているムスリム捕虜の交換を行うための使節が、アラウィー朝からマドリードへ派遣されることとなった。

本稿は、1690-91年にスペインへ派遣された外交使節をつとめたムハンマド・イブン・アブドゥルワッハブ・ワズィール・ガッサーニー *Muḥammad ibn ‘Abd al-Wahhāb al-Wazīr al-Ghassānī al-Andalusī al-Fāsī* (d. 1707) によって書かれたスペイン滞在報告書『捕虜解放のための大臣の旅 *Riḥlat al-Wazīr fī Iftikāk al-Asīr* (以下、捕虜解放の旅)』を中心に、イスラーム支配下のイベリア半島、すなわちアンダルスに出自を持つマグリブのムスリムが、どのように

1) アラーイシュは、上述の17世紀におけるサアド王朝の王位継承争いの過程でスペインに譲渡された。詳細については García-Arenal et. al. 2002, 特に123-134頁を参照。

カトリック・スペインの社会を観察し、その現実を通してアンダルス<sup>2)</sup>の過去をいかに想起したのかの一端を明らかにすることを目的とする。

## 1.2. ガッサーニー略歴

ガッサーニーは、マフザンと呼ばれるモロッコ宮廷に仕える学者一族の出身で、写本を作成する写字生としても完璧な原稿を素早く書き上げると高い評価を受けていた。『鳩の頸飾り』の著者として有名な11世紀アンダルスの法学者であるイブン・ハズムの著作を、ガッサーニーが書き写した写本がラバト国立図書館に現存しているほか、彼自身による詩や散文、外交書簡なども現存する。加えて、スペインから帰国後の1693年には、モロッコで行われたフランス使節との交渉にもガッサーニーが参加していた記録が残されている。また、1701年にはムーレイ・イスマイールの息子であるアブドゥルマリクが主導するオスマン帝国領アルジェリアへの使節にも同行していたことから、彼がスルタンから厚い信頼をよせられていた様子がうかがえる<sup>3)</sup>。その後、彼は1707年に疫病が流行するフェスで死去した<sup>3)</sup>。

ガッサーニーのニスバ（出自・家族名）である「アンダルスィー・ファーシー al-Andalusī al-Fāsī」が示すとおり、彼はフェスのアンダルス出身者の家系に属する。加えて、アラビア語で「大臣」を意味するワズィール Wazīr という語も名前に含まれているが、彼自身はその地位に就いておらず、宮廷での公式の地位は書記であった。このワズィールという家族名は、ガッサーニーの一族に、16世紀後半のサアド朝のアフマド・マンスールに翻訳官および宮廷医として仕え、「大臣」と名乗る資格のあったスペインのパストラーナ（グアダラハーラ県）出身のモリスコ<sup>4)</sup>が存在したことに由来すると考えられている<sup>5)</sup>。

2) Zhiri 2016: 968-969.

3) Al-Qādirī, vol.3: 132.

4) モリスコ morisco とは、16世紀前半以降のスペインでカトリック信仰へ改宗したアンダルス・ムスリムの末裔を指す。王権や教会は、モリスコたちの改宗の真偽を常に疑い、異端審問や福音化事業をはじめとする手段を用いて、モリスコを迫害し続け、最終的には、1609～14年にかけてスペイン全土からモリスコを追放した。詳細については、押尾 2021 を参照。

アフマド・マンスールの宮廷には、世俗学問への興味が満ちており、翻訳官として、非アラビア語の学術著作をアラビア語へ、あるいはその逆の翻訳活動を行うモリスコたちの姿が史料から確認できる。本邦では、佐藤健太郎の一連の研究で知られるモリスコ知識人のアフマド・ブン・カーシム・ハジャリーもその一人である<sup>5)</sup>。ワズィールという家族名は、ラテンアルファベット表記ではアルグアシル *Alguaçil / Alguazir* と表記され、家族名としてしばしば用いられたため、複数のスペイン語史料でアルグアシルまたはワズィールの名前を持つモリスコ（またはアンダルス系ムスリム）が確認される。たとえば、17世紀には、ムハンマド・アルグアシル *Muhammad Alguazir* という人物がサアド朝スルタンのムーレイ・ザイダーン（在位1603～1627）の命をうけてスペイン語でキリスト教信仰に対する論駁書を著したことが知られているが、この人物が本稿で取り扱うガッサニーと血縁関係にあったかどうかについて同定することは難しい<sup>7)</sup>。

### 1.3. 史料『捕虜解放の旅』

『捕虜解放の旅』はおおまかに、①モロッコ出立からスペイン上陸、マドリードまでの行程について、②スペインの各都市、社会政治状況、特にマドリードにおける経験について、③ムスリムによるアンダルス征服史、という3つのパートに分けることができる。なお、使節の目的が1689年のアライシュ奪回時に生じたスペイン側の捕虜とスペイン国内のムスリム捕虜との交換交渉だったにもかかわらず、実際に双方の捕虜が交換・解放されたのかどうかの結末についての記述はない<sup>8)</sup>。一方で、この史料の①と②の大部分にわたって、17世紀末スペインの各都市の外観やモリスコの子孫を含む現地住民の様子、様々な宗教的祝祭、異端審問や郵便制度をはじめとする社会制度、スペインの王位継承に関わる政治機構などが詳述されている。このような地理的社会的状

5) *Al-Qādirī*, vol.3 : 173-174.

6) ハジャリーについては以下の研究を参照、佐藤 2006 ; 同 2014 ; 同 2016。なお、ハジャリーの知人にもアルグアシルという名前の知識人がいたことが確認されている。

7) *Wiegiers* 1996 : 109-110.

況の詳細さゆえに、18世紀以後も彼の著作はヨーロッパへ派遣されたモロッコの外交使節によって大いに参考にされた。

本史料ではスペイン語（カスティーリャ語）の名詞や人名が、アラビア文字に原音のまま転写されている点も特徴の一つとして挙げられる。例えば、修道士はアラビア語であれば通常 *rāhib* などと表記されるが、これを *farāiliya*（西語：*fraile*）と転写したり、異端審問を *inkisīthiyūn*（西語：*inquisición*）と転写したりすることで、スペイン語での発音を忠実に書き写している。また、ハブスブルク家をはじめとしてヨーロッパの王族・貴族については、神聖ローマ帝国皇帝カール5世（スペインの君主としてはカルロス1世）を、*Karulūs Kīnṭū*（西語：*Carlos Quinto*）と転写し、フェリーペ2世についても *Filib Shakūndu*（西語：*Felipe Segundo*）と名前ばかりでなく序数詞も含めて正確に書き写して、原語の音を重要視している様子が見えてくる。

アラビア文字でスペイン語を表記するという外見的特徴からは、ガッサーニーの記述は彼のアンダルス家系という出自も相まってアルハミーア文献 *literatura aljamiada*<sup>9)</sup> のようにも見える。しかし、『捕虜解放の旅』の文章はすべてアラビア語で書かれており、あくまでガッサーニーによるスペイン語のアラビア文字転写は当時のマグリブ（モロッコ）に存在しないか、あるいは新奇な事物の名称を原語であるスペイン語そのままの音で書き記そうとした試みであろう。一方で、彼がアラビア語で、「非アラブ（の）、非アラビア語（の）」を意味するアジャム *‘ajam* やアジャミー *‘ajamiī* という語を用いて、スペイン語やスペイン人を表していることから、これらの語の使用がガッサーニーのスペ

8) 本文中では、スペイン君主と交渉が行われ1,000人のムスリム捕虜が国中から集められた、ということまでは書かれている。これらの捕虜の行く末については、他の史料からスペイン・モロッコ双方の捕虜たちが1691年9月には無事にセウタで交換され、ムスリム側の元捕虜たちは同年10月に当時の王都メクネスで解放を記念するパレードに参加したことが確認できる。このような捕虜解放を祝うパレードは、君主の権威発揚のために行われ、モロッコだけでなくフランスでも同様の目的で行われていた。Beck 2015：294-295；Zhiri 2016：974；金澤 2019：64-65。

9) アルハミーア文献とは、キリスト教支配下に残留したムスリム（ムデハル）や、モリスコによって、アラビア文字を用いてスペイン語（カスティーリャ語）を表記する書記方法で書かれた史料群をさす。

インに対する対抗心や敵愾心の現れであるという見解も存在する<sup>10)</sup>。後述の通り、ガッサーニーがヨーロッパ各国の君主の呼称を呼び分けていたことは事実であるが、16～17世紀前半のスペインにおいてアジャミーという単語は、モリスコの間でスペイン語（カスティーリャ語）を表す言葉として用いられており、西地中海という地域的文脈では、この言葉を否定的な意味を付与して意図的に用いていた可能性は低いと考えられる<sup>11)</sup>。

『捕虜解放の旅』は、19世紀以前のアラブ人あるいはムスリムのヨーロッパ観を明らかにする史料として、19世紀後半からヨーロッパの研究者の注目を集めており、オリエンタリストや東洋史研究者によって複数の翻訳や抄訳が編纂されてきた。1867年には、スタンレー H. E. J. Stanley がリスボン国立図書館所蔵の写本を用いて『捕虜解放の旅』の概要に関する論考を発表し、1884年にはソヴェール Henri Sauvaire がマドリード国立図書館所蔵の写本をフランス語に訳出した。上記二点の研究とも、同書内の③アンダルス征服史については、詳細を記述せず既知のことであり、省略するか非常に短い記述に留めている<sup>12)</sup>。

その後1940年には、スペイン保護領モロッコで、モロッコ研究センター Centro de Estudios Marroquíes に所属していたレバノン出身のマロン派キリスト教徒アルフレド・ブスターニー Alfredo al-Bustani によって、『捕虜解放の旅』のスペイン語訳とアラビア語校訂版とが合わせて発表された。ブスターニーはソヴェールが用いたマドリード国立図書館所蔵の写本一点に加えて、北部モロッコの図書館所蔵の写本2点を用いて校訂と翻訳を行った<sup>13)</sup>。ブスターニーのス

---

10) Baumi 2018 : 56-59.

11) アルハミーアという語自体がアラビア語のアジャミーヤ、すなわち本文中で説明したアジャムに由来する語である。アンダルス・ムスリムが、キリスト教徒の話すロマンス語諸語をアルハミーアと呼称する例は14世紀から史料のなかで確認され、16世紀後半に布告されたフェリーペ2世の王令の中にも、「モリスコたちが呼ぶところのアルハミーア aljamia であるカスティーリャ語」という文言が確認できる。また、アルハミーア文献の中でも、カスティーリャ語は alchamia や 'ajamī という言葉で表現されることも多い。押尾 2021 : 58, 注(2)。

12) Stanley 1868 ; Al-Ghassānī 1884.

13) Al-Ghassānī 1940.

ペイン語訳はこれまで省略されてきた③のパートも含んでいるが、史料内の記述でキリスト教信仰や聖職者が侮辱されていると判断された箇所については削除しているため注意が必要である。なお、ブスターニーによる校訂版で、初めてこの作品の作者名と作品名が明記されることになった。

その後、2003年にナビル・マタル Nabil Matar は、17～18世紀のヨーロッパやアメリカ大陸を旅したアラブ人やムスリムの旅行記を扱った研究のなかで、マドリド国立図書館の写本を主に使用し、『捕虜解放の旅』を英語に訳出した<sup>14)</sup>。スタンレー版は、『捕虜解放の旅』の要約であったが、マタル版ではブスターニーが使用したモロッコの写本に登場するアンダルス征服に関する記述や詩以外のすべてを訳出対象としている。

これらに加えて、アラビア語校訂版については、2002年にヌーリー・ジャッラーフ Nūrī al-Jarrāh がブスターニーのアラビア語校訂版部分に加筆修正したものを出版したほか、2005年にはアブドゥルラヒーム・ベンハッダが、マドリド、ルーアン、ティトワーン（テトゥアン）、ラバトの図書館や文書館に保管されている4点の写本を使用した校訂を東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所から出版した<sup>15)</sup>。ジャッラーフとベンハッダによる校訂版には、上述の翻訳や校訂で行われた省略がないという点は重要である。なお、ベンハッダによる校訂版は、複数の写本を参照しており、もっとも信頼がおけると考えられる。本稿では、主にベンハッダ版を使用しつつ、適宜ブスターニーのスペイン語訳（1940年）とマタルの英語訳（2003年）を参照した。

#### 1.4. 先行研究

前述の通り、『捕虜解放の旅』は、ムスリムが近世ヨーロッパ社会をどのように捉えたかを知るために重要な史料である。バーナード・ルイスは、19世紀以前のイスラーム世界はヨーロッパに対する政治的地理的関心がほとんどなく、ヨーロッパが技術的、経済的、軍事的な脅威となって初めてヨーロッパへの興

14) Al-Ghassānī 2003a.

15) Al-Ghassānī 2002 ; Al-Ghassānī 2005.

味関心が生まれたという概略的な評価をくださった。一方で、モロッコとヨーロッパ（とくにスペイン）との関係の例外的親密さについて、ガッサーニーや彼に続くアラウィー朝の外交官たちの旅行記を取り上げて指摘し、スペイン・ポルトガルとの地理的近接性および両国の軍事的脅威が要因となって、モロッコのイスラーム王朝は例外的にヨーロッパとの交渉に積極的になったと論じた<sup>16)</sup>。

このようなルイスの見解に対して、マタルは16世紀から19世紀にかけてのアラブ＝ムスリムによるヨーロッパに関する歴史書や旅行記を取り上げて、ムスリムの関心はヨーロッパ地域に常に向けられており、「ムスリムのヨーロッパ発見」などというものが19世紀に突如として起こったわけではないと批判している。加えて、キリスト教とイスラーム、ヨーロッパと中東という二項対立的な認識構造自体が、キリスト教ヨーロッパ世界の優越性を自明とするものであり、北アフリカや中東地域出身者のヨーロッパについての記述は、同時代のヨーロッパ人の記述よりも客観的に事象を観察し、「オリエンタリズム」のような偏見に陥らず記録していたと評価した<sup>17)</sup>。また、16～18世紀の「モロッコ人」のスペイン認識について、アラビア語の年代記や旅行記をもとに分析したAl-Saudは、近世においてモロッコとスペインの両国が政治経済的関係を常に維持していた事実よりも、軍事的対立を顕著に記述するアラビア語年代記の特徴が、両国の関係をその実態以上に敵対的なものと認識させてきたと指摘している<sup>18)</sup>。

『捕虜解放の旅』におけるガッサーニーの記述が17世紀末のスペイン社会を詳細に描写したものであることは、多くの先行研究が指摘するところであるが、その一方でガッサーニーは訪れた場所のアンダルス時代の歴史に関する記述をたびたび挿入し、スペインの現在とアンダルスの記憶とを交差させる。特に、モリスコ子孫やコルドバなどの歴史的建造物は、栄光のアンダルスの残滓とし

---

16) Lewis 2001 : 133-134.

17) Matar 2003a : xiii-xv.

18) Al-Saud 2009.



て文中に登場し、ガッサーニーがそれらの事物のイスラームへの回帰を祈願している様子が見えがえる。Stearns は、マグリブ・アンダルス知識人によって10～17世紀に書かれた著作中のアンダルス表象に着目した研究のなかで、19世紀までアンダルスはイスラーム世界の「失われた楽園」としてではなく、驚異譚やジハード（聖戦）、終末論に関わる土地として描かれていることを明らかにした。ガッサーニーをはじめとしてスペインへ派遣されたアラウィー朝使節の著述のなかにアンダルス奪還への期待や「失われた楽園」への郷愁といった表現の萌芽が見られると Stearns が指摘したことを受けて、Hermes は『捕虜解放の旅』に現れるこれらのアンダルス表象を分析し、同著作がその後のアラブ人知識人によるアンダルスの過去への郷愁を表明する文学の雛形の一つになったと評価している<sup>19)</sup>。

本稿においても、『捕虜解放の旅』に描かれた歴史を取り扱うが、遠いアンダルスの栄光についてではなく、より近い過去、すなわちアンダルス・ムスリムの末裔であるモリスコの歴史的経験を、同じくアンダルスに出自をもつガッサーニーがカトリック・スペインの現実を通していかに想起したのかの一端を明らかにすることを目指す。

## 2 外交官としてのガッサーニーとその任務

### 2.1. スペインに派遣されたアラウィー朝の外交官たち

アラウィー朝にとってスペインは、自国の地中海・大西洋沿岸の諸都市を占領し、ジブラルタル海峡を挟んで隣り合うヨーロッパの隣国であり、衝突と交渉を繰り返す相手であった。16世紀後半から19世紀末の間に、ガッサーニーを含め16人の使節がモロッコからスペインへ派遣され、捕虜の解放やその取り扱いについて、私掠船活動や沿岸都市への攻撃をめぐる平和条約の締結などについて交渉が行われた。これらの使節のうち、4人が自身の旅行記を残して

---

19) Stearns 2009 ; Hermes 2016.

いるが、ガッサーニーはその最初の一人であり、彼の著作はのちの外交官、著述家たちにも大いに参考にされた<sup>20)</sup>。

『捕虜解放の旅』におけるヨーロッパ、スペイン、そしてその植民地であるアメリカ大陸に関する記述の豊富さと正確さは、当時のイスラーム世界のヨーロッパへの一般的な興味関心と比べても傑出している。たとえば、オスマン帝国修史官であったムスタファ・ナイマの著作として知られる『歴史』は、1591-1660年のオスマン帝国史を取り扱っているが、黒海地域やバルカン半島についての記述が主要なテーマであり、イングランドやフランス、スペインなどの西ヨーロッパの歴史事象についての言及は少なく、君主の名前や治世の時期などに誤りが見られるものであった<sup>21)</sup>。しかし、オスマン帝国領域の知識人がとくに興味を示し、正確な情報を得ていたヨーロッパが、いわゆる西欧ではなくオスマン帝国領のルメリ州（バルカン半島）や帝国の従属国とその周辺であったことは、その地理的近接性や政治的重要性から考えても妥当であろう。

サアド朝やアラウィー朝がスペインをはじめとするヨーロッパ諸国に使節を派遣した主な目的である捕虜の解放は、キリスト教とイスラームが交錯する近世の東西地中海地域における大きな政治経済の問題であった。サレヤティトワーン、アルジェなどのイスラーム側の諸都市に囚われたキリスト教徒の捕虜の身請けのために、聖三位一体修道会やメルセス修道会が代理人として派遣されていたことはよく知られている。また、キリスト教諸国側では、カディスや

---

20) ガッサーニーに続くスペインへ使節は18世紀半ばまで派遣されることはなかった。これは、1727年にムーレイ・イスマーイールが死去したことで、アラウィー朝が王位継承争いとそれに伴う混乱に突入したことが大きな原因である。その後、ムハンマド3世（在位1757-90）がこの混乱を収拾し、1766年にガッザール *Aḥmad ibn al-Mahdi al-Ghazzāl* (? ~1777) を、スペインに囚われたムスリム捕虜の解放や待遇改善の交渉のために派遣した。つづく1779-80年には、スペインとの平和条約の締結と同じくムスリム捕虜解放のために、イブン・ウスマーン・マクナーシー *Muḥammad Ibn 'Uthmān al-Maknāsī* が派遣された。マクナーシーは自身のスペイン滞在について記した著作を『捕虜解放についての霊葉 *Al-'Iksīr fī fikāk al-'asīr*』と命名している。アラビア語題の音韻に着目すれば、これが『捕虜解放のための大臣の旅 *Rihlat al-Wazīr fī Iftikāk al-Asīr*』にちなんだ題名であることは明らかであり、ガッサーニーの著作の影響力の大きさをうかがわせる。Al-Ghassānī 2005 : 11-12 ; Bouchar 2018 : 46-47.

21) Lewis 2001 : 188-189.

マルセイユ、リヴォルノのような港町に加えて、マルタ島が捕虜および奴隷を取引する市場として機能していた。これらの諸都市に囚われたムスリム捕虜も知人や友人、つてのある有力者に書簡を送り、身代金の支払いを依頼し、捕虜／奴隷状態からの解放を画策していた。捕虜たちは解放されれば、元の自らの居住地域に戻ることができたが、身代金が支払われず、身請けをされなかった者たちの運命は過酷で、事故や疫病などで死亡したり、奴隷として売買されたりしたのである。捕虜たちのなかには、改宗を通じて自らの宗教的帰属を変更し、状況の改善を図ったりする者もいた。

18世紀から本格的に開始される中間航路を用いた大西洋の奴隷貿易に比べれば、地中海の捕虜の総数は少ないと推測されるが、それでもなお16世紀前半から18世紀後半にかけて、約100万人以上のキリスト教徒捕虜がマグリブ（北アフリカ）に存在していたと推計されており、ヨーロッパ側に囚われたムスリム捕虜もそれと同数程度が存在したと仮定すれば、地中海地域全体で約200万人が捕虜として、身体を自由を奪われ、売買の対象となっていたことになる<sup>22)</sup>。このような地中海における捕虜／奴隷の経験については、キリスト教徒の手による史料に研究者の注目が集中しがちであったが、近年はムスリムの手による史料についての研究も進みつつある<sup>23)</sup>。

以上を踏まえれば、ジブラルタル海峡を挟んで隣合うスペイン・モロッコの両国にとって、自陣営側の捕虜をいかに解放し、相手陣営から政治的・経済的な利益を引き出すのかは、外交上の大きな関心になっていたことは想像に難くない。それゆえ、ガッサーニーがスペインに赴いたこの時期には、それ以前までのように戦争状態が常態化した二国間関係ではなく、対峙しつつも交渉の余地のある新しい外交関係を両国は模索する必要に迫られていたといえよう。

---

22) 金澤 2019 : 61-63.

23) 特にマタルは、ムスリムによるキリスト教徒捕虜の残酷な扱いが、元捕虜たちの手記などによって流布される一方で、ムスリム捕虜の経験談が等閑視されてきたを批判している。また、本邦では末森が、マルタ島に囚われたオスマン朝のムスリム捕虜が残した詩を含む史料を用いて、その捕虜生活を一端を明らかにしている。Matar 2021 : 11-23 ; 末森 2021.

## 2.2. 旅の目的と旅のルート

スペインへ派遣されたガッサーニーの主たる目的が捕虜解放にあったことは事実だが、この使節にはもう一つ大きな目的が存在した。それが、スペインに残されたアラビア語写本の返還交渉であった。返還要求の対象となったアラビア語写本は、アンダルス時代から引き継がれたものや1571年のレバント海戦時に戦利品として獲得されたものに加えて、1612年にフランス私掠船によって強奪され、その後スペイン王室の所有物となり、エスコリアル修道院に収蔵された、サアド朝スルタンのムーレイ・ザイダーンの写本コレクションであった。

この写本コレクションは、彼の父であるアフマド・マンスールから受け継がれたものであり、中にはイスラーム諸学や医学、詩学にまつわる著作ばかりでなく、イスラームの聖典であるクルアーン（コーラン）の写本も含まれていた。ムスリム君主としては信仰を象徴するクルアーンが異教徒の手元にあるというのは容認し難いことであったようで、ムーレイ・ザイダーンの後継者も1651年に返還要求を行ったが、これは当時のスペイン国王フェリーペ4世によって拒絶されている<sup>24)</sup>。

この写本返還要求は、捕虜の解放とは一見関係がなく、非合理的な要求のように思えるが、アラウィー朝のムーレイ・イスマーイールは、アラビア語写本とムスリム捕虜の交換を真剣に検討していた。異教徒の手に囚われたムスリム捕虜の解放と同様に、異教徒の手にある写本の奪回は、ムスリム君主の宗教的正当性を補強する行いでもあった。それゆえ、1698年にフランスに派遣されたアラウィー朝の外交使節もまた、ルイ14世の手元にあるアラビア語写本の引き渡しを要求している<sup>25)</sup>。

当時、アラウィー朝はスペインやポルトガルに占領されていた沿岸都市の再征服を進めており、マフディーヤを1681年に、アラーイシュを1689年にそれぞれ奪回し、住民や軍人を含む多くの捕虜を獲得していた。スペイン側も、これらの捕虜の解放についてアラウィー朝と交渉するために翌年1690年に、聖三位

---

24) Beck 2015 : 292-293 ; Matar 2021 : 217.

25) Al-Ghassānī 2005 : 16.

一体修道会の使節 Manuel Viera de Lugo を派遣した。その交渉の場では、モロッコ側からはアラアイシュの捕虜の解放と引き換えに、セウタかメリーリヤの引き渡し、あるいはスペインに勾留されているムスリム捕虜1000人の解放が要求され、一方でスペイン側からは、アラアイシュの捕虜たちに加えて司祭や教会の彫像、装飾品などの解放と返還の要求が伝えられた。その後の交渉で、モロッコ側はセウタやメリーリヤの引き渡しという条件に代えて、500人のムスリム捕虜か5000点のアラビア語写本の引き渡しを、捕虜解放の条件として提示した。この提案に対して、Viera de Lugo は返答する権限を持っていなかったため、スルタンの信頼の厚い書記であり、知識人としても写生字としても高名であったガッサーニーが交渉の使節としてマドリッドへ派遣されることになる<sup>26)</sup>。

ガッサーニーの使節団は、1690年10月19日（ヒジュラ暦1102年ムハッラム月15日）に、セウタから出港し、ジブラルタル、タリーファを経由して、カデイスに上陸した。その後、プエルト・デ・サンタ・マリーア、ヘレス・デ・ラ・フロンテーラ、レブリーハ、ウトレーラ、マルチェナ、エシハ、コルドバ、エル・カルピオ、アンドゥーハル、リナレス、トーレ・デ・ファン・アバド、ラ・ソラーナ、メンブリーリヤ、マンサナーレス、モーラ、ヘタフェを通過し、同年12月6日（同年ラビーウ月7日）<sup>27)</sup>にマドリッドへ到着した。彼はマドリッドで6ヶ月以上を過ごしたのち、任務を終えトレードへ向けて1691年5月29日（同年ラマダーン月1日）に旅立った。わずか8ヶ月弱のスペイン滞在であったが、ガッサーニーが『捕虜解放の旅』に残した近世スペイン社会の諸相に関する記述は詳細なものであり、同時代のムスリムの歴史家が興味をあまり示さない西ヨーロッパ諸国の歴史や、カトリック聖職者との宗教的議論も記述には含まれている。それゆえに、ガッサーニーは単なる外交官の枠を越えて、歴史学者、民俗学者、宗教家といった多様な顔を持つ人物であったといえるだろう<sup>28)</sup>。

26) Arribas Palau 1985 : 216 ; Zhiri 2016 : 970-971.

27) マタルは 1691 年 1 月 6 日と同定している。Matar 2003a : 142.

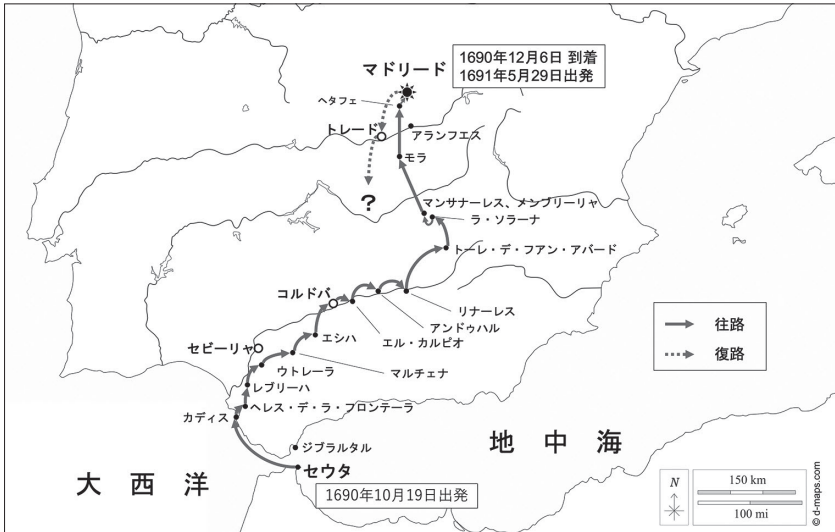


図2 ガッサーニーの行程 (1690-1691) d-maps.com より作成

### 2.3. スペインの情景

カディスに上陸してのち、ガッサーニー一行は行く先々の町や村で歓待を受けるが、これはスペイン側が、モロッコ使節が通過するルートに厳密に管理していたことが大きい。スペイン側はイスラーム王朝からの使節が通過しても問題のない、あるいは見られても問題のない都市や村落をルートに選んでいたと推測されるため、ガッサーニーが観察したスペイン社会像は、事前にスペイン側の意図が干渉しているものであった点には注意が必要であろう。とはいえ、ガッサーニーはその旅路で、彼の視点から理解し得たスペイン社会の特徴にいくつも言及している。

ガッサーニーは、アンダルシアの都市や村々を通過する過程で、私掠船団などに襲われる可能性のある沿岸部の都市を除いて、当時のスペインの諸都市が城壁を建築していない、あるいはかつての城壁を修復せず放置していること

に言及する。これは、城壁を備えることが通例であるマグリブのイスラーム都市の外観に慣れた当時のムスリムにとっては大きな衝撃であった<sup>29)</sup>。また、街道沿いに宿泊施設が整備されていることに注目して、特に郵便配達人 *raqqāṣ* は *bīnṭa* (西語: *venta*) と呼ばれる旅籠で休息をとり、馬を交換しながら旅を続けることができるため、迅速に職務を遂行することができる旨と指摘している。加えて、貨幣経済が発達しており、通常の旅行者も金銭さえ持っていれば寝床の心配も要らず、食料も持ち歩かなくて良いとまで述べている<sup>30)</sup>。ガッサーニーは郵便制度や新聞 *al-kāsiṭa* (西語: *gaseta*) について、その情報伝達速度に大きな関心を持ったらしく、マドリードに到着してからも、国内郵便のみならず国際郵便の仕組みについても言及している。

アンダルシアの諸都市を通過している際には、上記のような内容に加えて、これらの地域がいかにかアンダルスの面影を残しているか、そしてそれが徐々に消え去りつつあるのかが語られる。特にコルドバのモスクについては、十字架が掲げられた教会に転用され、建物の中央部に礼拝堂が設置されていてもなお、かつての威容が失われていないことをその柱や門の数まで数え上げて確認している<sup>31)</sup>。

その一方で、スペインの王都にして大都市であるマドリードに到着してからは、都市の様子や執り行われるキリスト教の宗教行事についての記述が増加する。捕虜に関する交渉が終わった後は、レティーロ宮殿の様子も描写され、冬に氷が張った川の上でスケートを楽しむキリスト教徒たちや、狩猟場で狩りに興じるカルロス2世たちの様子が語られる。また、大きな人口を抱えるマドリードは食料を自給せず、遠くロンダやグラナダから果物を、アリカンテからは海産物を、そしてパンすらも近隣の村々から運び入れ、市場では多くの女性

29) ガッサーニーは、「文明 *ḥaḍāra*」と「田舎／荒野 *badāwa*」というイブン・ハルドゥーンによる文明概念を用いて、まちや村を評価した。その興味深い基準として都市の防壁が機能しているか否かで、彼は村落やまちを「文明」、あるいは「田舎」に属すると分類しているように見受けられる。

30) Matar 2003a: 134-136.

31) Al-Ghassānī 2005: 64-66.

が売買に携わって働いていると述べる。マドリード市内にパン屋がないというのはガッサーニーの誇張であろうが、内陸都市のマドリードに海産物や果物が運び込まれているという描写は当時のスペインの交通網の発展について彼が驚愕を持って受け止めていたことを示唆している<sup>32)</sup>。また、郵便制度と並んでガッサーニーが興味を持ったのは病院 *māristān* であった。ガッサーニーによれば、彼の滞在時には14の病院がマドリードにあり、そこではベッド、飲食物、菓子類に加えて、手厚い治療と看護が受けられた。女性の病人には女性の、男性の病人には男性の介護人が割り当てられ、所属の医師は病院の近くに住んでいた。また病院の諸経費は聖フアン修道会（聖ヨハネ病院修道会 *Orden Hospitalaria de San Juan de Dios*）の資金でまかなわれていた<sup>33)</sup>。ガッサーニーが *māristān* というアラビア語を用いていることからわかるように、病院（施療院）の存在自体は新奇なものではなかった。マグリブにおける病院の歴史は古く、12世紀末のムワッヒド朝期にまで遡ることができる。また、フェスにも財産寄進制度であるワクフ（ハブス）によって運営される病院が存在しており、この記述からはガッサーニーがスペイン・モロッコ両国の医療制度の比較を行う意図がうかがえるだろう<sup>34)</sup>。

近世スペイン社会を考える上で、避けることができないのは、貴族制や「血の純潔 *limpieza de sangre*」規約<sup>35)</sup>によって維持される社会秩序であろう。17世紀スペイン社会の身分制秩序は、国王・貴族・聖職者という特権階級、それ以外の平民、さらに下位に奴隷が存在するという、前世紀からの構造を基本的にはそのまま継承していた。ガッサーニーが交渉を行い、直接関わりをもった

---

32) Al-Ghassānī 2005 : 108-110.

33) Matar 2003a : 158-159.

34) 13世紀に建設されたフェスの *Sidi Frej* 病院はもともと総合病院的な機能を果たしていたものの、16世紀には著しく衰え、精神疾患患者の療養施設になっていた。

Kogelmann 2002 : 70-73.

35) 「血の純潔」規約とは、4世代遡って祖先にユダヤ教徒やムスリムがいる者に対して、都市の官職や参事会、大学寮、修道会への加入を拒む制度で、新規改宗者たちのキリスト教社会上層への参入を妨げる仕組みとしても機能した。ただし、この規約はスペイン全土で統一的に施行されたものではなく、各社団によってその制定理由や運用実態も多様である。詳細については、坂本 2010 を参照。



人々のほとんどは特権階級に属する人物たちであるが、ガッサーニーはこの時代のスペインの住民たちがいかに「手仕事 *oficio mecánico*」を蔑み、貴族身分に固執していたのかについて、以下のような興味深い記述を残している。

彼らの慣習の一つに、王のまち [マドリッド] では、手工業や商業に従事するものは、馬車に乗らないというものがある。もし誰か貴族になりたい、あるいは王の臣下とみなされるためマフザン（宮廷）に近づきたいのであれば、彼は金を稼ぐがゆえに侮辱される仕事 *hīraf* を捨てて、彼の子孫が [その身分に] 到達することを願うのである。しかし、彼自身については、天秤も使わず、店にも座らないような富裕な商人——つまり、非常に巨大な取引と資金をもち、店や市場での売買をする必要のない大商人——でないかぎり、どうやっても政府のなかに地位を得ることはできない。それゆえ、彼は商売をやめ、それに全く振り向かなくなることによって、貴族になることができる。

貴族の地位を持つ者は、着ている衣服の肩の上に彼らの間でよく知られた形で十字架を描く。それは、各世代におけるキリスト教徒たちからの証書をもって、彼自身の七人の祖先を遡れる、古いキリスト教徒 *qidam fī al-naṣrānīya* でなければ到達することはない、高い地位である。

そのキリスト教徒たちは、[中略] 誰一人として中傷する者はおらず、少しの汚点もなく、ユダヤ教徒やその他の非キリスト教徒であるという嫌疑もない [ものでなければならない]。そして、十字架を肩に付ける行いのために役人に税金を払い、加えてその行為を認可した修道士 *farāīliya* にも税を支払ったのち、この [十字架を肩に付ける] 行為が命じられる。それは、彼らの宗派と偽りの儀礼において義務である。

この十字架の記章は、[中略] キリスト教徒の古い血統を持つ者や、アンダルスの民に出自の貴族の血統を持つ者であり、彼らは意図的にキリスト教へ改宗し、それゆえその記章を与えられた。その記章は、イスラーム時代に由来する彼らの名門の血統の古さを証明するものであり、偽りの信仰 [キリスト教] における彼らの貴族の記章でもある<sup>36)</sup>。

職工や商人は仕事をやめなければ貴族身分に到達し得ないが、商人であつても自ら商いをしないような富裕な大商人であれば、たやすく貴族身分を得ることができる、という記述から、ガッサーニーがスペイン社会における手仕事への蔑視を認識した様子がうかがえる。また、衣服の肩の上に十字架を描くという行為については、旧キリスト教徒の家系の重視という「血の純潔」規約に相当する描写があることから、同規約を導入していたサンティアゴやアルカンタラ、カラトラバといった宗教騎士団への入団を示していると考えられる。ここで注目に値するのは、キリスト教へ改宗した元ムスリム貴族の末裔をキリスト教徒と同じ十字架を描いた記章を肩につける人々として描いている点である。後述するように、モリスコ子孫たちの中には、キリスト教貴族社会に同化しつつも、自らの出自を誇るナスル朝王族の子孫も存在した。イスラーム信仰を捨てカトリック信仰へ自発的に改宗した人々は、棄教者として当然厳しい批判にさらされそうなものであるが、ガッサーニーの彼らに対する舌鋒は鋭くない。

さらに、異端審問については、隠れユダヤ教徒として訴えられたコンベルソを訴追し、逮捕や投獄、財産没収とその再分配を行う司法機関であり、被告が悔い改めなければ火刑に処されることが説明される。ここでユダヤ教徒が異端審問の被害者として描かれるのは、17世紀末の主な訴追対象がスペイン在住のポルトガル系コンベルソであったことや、ガッサーニー自身が目撃した事例がコンベルソの裁判だったことも影響していると考えられる<sup>36)</sup>。一方で、コンベルソと同様に異端審問によって迫害されていたモリスコの被害については、不自然なまでに言及がないため、そこにガッサーニーの何らかの意図が働いていることは否めないだろう。

---

36) Al-Ghassānī 2005 : 92 ; Matar 2003a : 145.

37) Al-Ghassānī 2005 : 99-101.

### 3 交錯するスペインの現実とアンダルスの記憶

#### 3.1. 旅の途中で出会うモリスコ子孫たち

ガッサーニーは『捕虜解放の旅』の中で、追放後もスペインに暮らすモリスコの末裔たちの姿を記録しており、その中にはガッサーニーに対して自らが「隠れムスリム」であることを示す人々もいた。例えば、ヘレス・デ・ラ・フロンテーラ近郊のレブリーハを通過した際には、「隠された合図 *ishāra khafiya*」によって自らがアンダルスの末裔であることを主張する人々にガッサーニーは出会い、彼らに「災いが降り掛かった」こと、すなわち彼らがキリスト教化してしまったことを嘆いている<sup>38)</sup>。このような「隠された合図」をモロッコ使節に提示するモリスコの末裔という姿は、『捕虜解放の旅』だけでなく、1766年にスペインへ派遣されたアラウィー朝使節ガッザールの記述の中にも登場するのだが、これがどのような合図、あるいは身振りなのかについては、どちらの著作にも詳細がないため不明である<sup>39)</sup>。

上述のような一般民衆の中のモリスコ子孫に加えて、旅の目的地であるマドリードでは、旧ナスル朝王家や名家のサッラージュ族、その他のナスル朝貴族出身の元ムスリムたちともガッサーニーは邂逅した。ガッサーニーは、彼らに請われるまま、イスラーム信仰やムスリムにまつわる話や、イスラーム信仰の実践や礼拝前に行う浄めであるタハーラの規則について、これらのキリスト教化した元ムスリム貴族の子孫たちに説明したと書き残している<sup>40)</sup>。

モリスコの追放から約80年が経過し、これらの人々は、社会的にも宗教的にもスペイン化、キリスト教化していた。例えば、ナスル朝王家の末裔であるドン・アロンソという名前の騎兵隊の隊長は、その武名が広く知られ尊敬を集める人物であった<sup>41)</sup>。彼は、自身がムスリムの子孫であることを公言しており<sup>42)</sup>、また自身の祖先の歴史やイスラーム信仰についても強い関心を寄せる人物で

38) Al-Ghassānī 2005 : 58.

39) Matar 2003b ; Al-Ghazzāl 2017 : 78-79.

40) Al-Ghassānī 2005 : 59-60, 71-73, 92.

あった。これをもって、17世紀末のスペイン社会がイスラームについて「寛容」であったと見なすことは難しいが、マドリードをはじめ内陸に暮らす人々の心からは、ムスリムに対する警戒心が徐々に薄れていっていたとも推測できる<sup>43)</sup>。

### 3.2. スペイン王家に関する記述

アンダルシーアの町々をとおって、マドリードへと到着したガッサーニーは、マドリード市内についての記述や同市で出会ったムスリム捕虜たちについて述べる。その後、一行はオスマン帝国やモスクワ大公国などの非カトリック国の使節が宿泊する施設に案内され、そこに滞在したのち、カルロス2世に謁見した。なお、ガッサーニーは、カルロス2世をはじめとしてスペインやポルトガルの君主を、「暴君 *ṭāghīya*」と基本的に呼称するのに対して、他のヨーロッパ君主に対しては「王 *malik*」や、「フランス王 *Aẓīm al-Faransīs*」, 「ドイツ皇帝（神聖ローマ帝国皇帝）*al-Inbirādūr min Almāniya*」と区別している<sup>44)</sup>。このような呼び分けからはスペインに対する明らかな対抗心、あるいは敵意が読み取れると指摘されているが、実のところフランス国王に対しても「暴君」という表現を使用している箇所が存在するので、文脈に依存するところも大きいと推

---

41) この人物は、ナスル朝君主ムハンマド12世ザガル（在位1485-87）を祖先として、アルメリアに領地を持つ *Alonso Bazán Hazen* という人物であると推測されている。  
*Zhiri* 2016: 993; *Sánchez Ramos* 1995: 617.

42) このように、キリスト教徒の貴族が、自らの血統が非キリスト教徒にあることを誇るという行為は、近世スペインに特有のものではない。16-17世紀のロシアでは、ロシア貴族が自身の祖先の出自を、ポーランドやリトアニア、ジョチ・ウルス（タタール系）起源に改ざんするという現象が起きていたが、これは当時の社会ではロシア出自よりも外国出自の家系に価値があると考えられていたためである。しかし、18世紀以後はロシア社会のヨーロッパ化とそれに伴う「文明化の使命」の内面化によって、タタール系を含めアジア系に対するイメージは否定的なものへと変化していく。  
*濱本* 2011: 46-47.

43) 『捕虜解放の旅』では、ガッサーニー一行が各地で、ムスリム捕虜や現地住民によって歓待された様子のみが記されているが、実情はより複雑であった。特に、マドリードへ到着した際には、市民から使節一行に対して侮辱行為が行われ、これに対してどのような外交的対応を取るべきか、スペイン側が協議した記録が残っているが、『捕虜解放の旅』では本件について言及していない。  
*Arribas Palau* 1985: 256-260.

測される。一方で外交の場では、各々の君主をどのように呼称するのかは、しばしば議論となるテーマであり、時代や力関係によって変遷していくことは確かである<sup>45)</sup>。

『捕虜解放の旅』で「暴君」と呼ばれるカルロス2世に初めて謁見した際に、その容姿や来歴、性格について、ガッサニーは以下のように描写している。

その暴君は、若く、年の頃は30歳くらいの男で、色白で背が低く、長い顔と幅広の額をしていた。カルロス2世 *Karulūs Shakūndu* と言う名前、これはかの王家でこの名前を持つ二人目 [の王] ということである。[王家の] 出身はフランドル、フラマン人 *al-aflāminku* の国であり、ムスリムと戦い、アンダルスやカスティーリヤ、その他のこの国の各地を征服したスペインの暴君たちの末裔ではない。

[中略]

フェリーペ4世 *Filib Kuwārṭu* は子沢山であったが、彼らの法律によれば、その子どもらは私生児 *Awlād zinā* であるため、王位を継承することはできない。彼の妻は、ドイツ皇帝（神聖ローマ皇帝）のいとこであり、[もともとは] 彼の息子 [の一人] と結婚させるためにスペインに連れてこられた。しかし、彼はマドリッドに婚約者 [であるこの従姉妹] が到着するとしばらくして死に、その後フェリーペ4世の妻も死んだ。そして、彼女が彼との婚約に適した年齢に到達すると、フェリーペ4世は彼女と結婚した。彼女は、彼の息子を産み、それがカルロス2世、今日の王 *ṭāghiya* である。フェリーペ4世が死んだとき、彼の息子はまだ幼く、その母が王となった。

---

44) サアド朝宮廷に出仕し、公文書や支配者を称える詩歌の編纂に携わったフィシュターリー *‘Abd al-‘Azīz al-Fishtālī* (1549-1621/1622) も、著書の中でスペイン君主と他のヨーロッパ君主を呼び分けており、カトリック信仰について呼称する際にはキリスト教 *al-naṣraniya* と区別して多神教 *al-shirk* という語を使用した。Matar 2009: 159-162; *Al-Fishtālī* 1972: 193-196.

45) Matar 2003a: 115-116.

[中略]

カルロス2世は成年に達すると、フランス王 *Azīm al-Faransīs* の娘と結婚した、しかし彼女は跡継ぎを残さず死んだ。その後、母方のおばの娘（従姉妹）で、ドイツ皇帝フェルナンドの娘と結婚し一年が経ったが、未だに [二人の間に] 子はない。彼は、旅をすることもなければ、街区に出ることもなく、戦場へ現れたこともない。ほとんど移動をしない人物で、馬や他の騎獣にも乗らないが、妻を伴ってほとんどいつも馬車に乗っており、彼は馬車で自身の狩場へ行く。また、いつも教会を訪ね、すべての信者たちと礼拝をしている<sup>46)</sup>。

上記の箇所では、カルロス2世の外見や動向、出自のハプスブルク家について、そして教会法の規定によって彼が王に選出された過程などがここでは語られている。なおマタルは、これより数年前に、カルロス2世に謁見した教皇使節による同君主の外見についての描写は、よりあからさまに身体的な薄弱さや醜さを強調したものだだったが、ガッサーニーは自らの君主が交渉するに相応しい相手として、カルロス2世の外見を控えめに描写したのではないのかと推測している<sup>47)</sup>。

また、カルロス2世以外のハプスブルク朝君主たちについてもそれぞれの事跡について、同箇所では詳細に述べられている。たとえば、イサベル1世の時代にはアメリカ大陸が発見されたこと、彼女の死後にはフェルナンドとの娘（フアナ）が跡をつぎフランドル人の夫（ブルゴーニュ公フィリップ4世）とともに統治したことが記述される。その後、カルロス1世（カール5世）については、彼のプロテスタント諸国との戦争やオランやチュニスに対する攻撃などが非難の言葉とともに述べられ、最終的に彼が修道院生活に入ったことも記録さ

---

46) Al-Ghassānī 2005 : 90, 102, 104.

47) 「王 [カルロス2世] は、背が高いと言うよりは低く、華奢だが体格は悪くはない。彼の顔は概して醜い。首は長く、幅広の顔と顎、そして典型的なハプスブルクの下唇（顎）で、あまり大きくないトルコ石のような青い目もち、上品で繊細な様子であった [中略] 彼は体も精神も薄弱である」 Matar 2003a : 192, note 29.

れている。

つづく、フェリーペ2世についての箇所では、彼とポルトガル王家との血縁関係から、アヴィス朝のセバステイアン1世とワーディー・マハーズインの戦い（アルカサル・キビール）へと話題は移っていく。この戦いの発端は、サアド朝の王位継承争いで、当時のスルタンのアブドゥルマリクに対して前スルタンの息子ムタワッキルが王位を要求し、そのための軍事援助をセバステイアン1世に懇願したことにあった。この遠征計画を聞きつけたフェリーペ2世は、セバステイアン1世に対して、自制を促したうえで、マグリブについての知識が不足していることや、「彼のものではない国への侵攻」であるので、セバステイアン1世自身は現地には赴かないようにと忠告した<sup>48)</sup>。フェリーペ2世のみならず、セバステイアン1世の大叔父にあたるエンリケ枢機卿やポルトガルの大貴族は、王に攻撃を取りやめるように進言していたことは事実であり、ここからはガッサーニーの記述の情報収集能力とその正確さがうかがえる<sup>49)</sup>。

しかし、この忠告は受けられることなく、セバステイアン1世とムタワッキルはワーディー・マハーズインの戦いで敗死し、勝利したサアド朝側は多くの戦争捕虜を得て、のちにはその解放に伴う多額の身代金を得た。またセバステイアン1世が後継者を残さず死亡したことで、ポルトガル王位は前述のエンリケ枢機卿に移り、彼の死後にはフェリーペ2世へと移ったことは周知のとおりである。ここでも、スペインでは男子の後継者がいない場合には女子への王位継承が行われたという点をガッサーニーは正確に記述している。

これに続いて、フェリーペ2世期の第二次アルプハラス反乱（1568-71）や、フェリーペ3世期のモリスコ追放などが語られる。フェリーペ4世期の大事件としては、ブラガンサ公爵によるポルトガル独立の詳細が記された後、現在の国王であるカルロス2世の誕生、母后マリア・アナ・デ・オーストリアの摂政就任、ファン・ホセ・デ・オーストリア、バレンスエラの政治闘争などが語られ、最終的にカルロス2世にガッサーニー一行がムーレイ・イスマーイー

48) Al-Ghassānī 2005 : 96-97.

49) García-Arenal 2009 : 12-13.

ルからの書状を手渡し交渉が再開する場面、すなわち現在に回帰する。

スルタンからの書状は、カルロス2世に仕えるアレppoのキリスト教徒である翻訳官 Abel Messi によってスペイン語に翻訳された。この書状にて、5000冊の写本と500人のムスリム捕虜を引き渡す要求がなされたが、スペイン側はエスコリアル修道院のアラビア語写本は火事によって焼失したことを理由に、写本の受け渡しを拒否した。その代替案として、ムスリム捕虜1000人の解放がモロッコ側より提示され、スペイン側はこの数をどうにか少なくしようとしたが、結局同意に至り、国中からムスリム捕虜を集めはじめた、とガッサーニーは記述している<sup>50)</sup>。なお、これで捕虜解放に関する交渉は終わり、続く箇所ではマドリードの食料事情や病院を初めとする都市機能、闘牛や四旬節の断食などの祝祭、教皇の選出方法（コンクラーベ）、マドリードに滞在するヨーロッパ各国大使とその国際情勢、聖職者との宗教的議論、カルロス2世による一行への歓待、アランフェス宮への招待などが描写される。その後、1691年5月29日にモロッコへと出発し、ガッサーニー一行がトレードの旧モスクを訪問したところで、『捕虜解放の旅』は現実のスペインから、アンダルス征服の歴史叙述へと内容が移っていく。

### 3.3. アンダルスの記憶

『捕虜解放の旅』では、モリスコによる第二次アルプハラス反乱について、フェリーペ3世期に行われたモリスコ追放についての記述も見られる。アルプハラス反乱や、モリスコ追放に関する記述で、興味深いのは以下の箇所である。

フェリーペ2世の時代には、キリスト教徒 al-naṣārā に征服された後もアンダルスに残留した人々の末裔たちがグラナダとその近辺にて、[キリスト教徒に対して] 反乱を起こした。[中略] そして、キリスト教徒たちは

---

50) Al-Ghassānī 2005 : 104-105.



アンダルスの反乱者たちに剣を振り下ろした。その後、逃げた者が逃げた後、ある者たちは意志に反してキリスト教に改宗した。彼らはそのような状況のまま、フェリーペ2世の息子であるフェリーペ3世 Filib Tirsū の時代まで、40年の間留め置かれた。彼らはキリスト教による征服と改宗という状況におかれていた<sup>51)</sup>。

上記で、ガッサーニーは反乱が鎮圧されたのちに、逃亡した者と、残留してキリスト教にその意思に反して改宗した者との二者が存在したと述べている。更に、ガッサーニーは続くモリスコの全体追放について述べる箇所では以下のように記述する。

こうして、暴君〔フェリーペ3世〕は彼の大臣が波に進言したことを受け入れて、彼ら〔モリスコ〕を集め、海を越えさせるように命じた。例外は意図をもってキリスト教徒になった者であり、その数は、嫌々ながらキリスト教徒になった者や、身を隠した者や匿われた者、何も知らなかった者の数よりも多かった。兎にも角にも彼らの数は多く、〔婚姻の〕雑多な状態とイスラームの忘却がゆえに、こちら側〔スペイン〕全体での彼らの徹底的な捜索は行われなかった。そして、当時のこちら側からの出国者たちの多くは、グラナダとその近辺の反乱者たちであり、その数は多かった。

同箇所でガッサーニーは、フェリーペ3世が追放を命じたのは「意図をもってキリスト教徒になった者」以外であるとしているが、実際には1526年にアラゴンで強制改宗令が發布されて以後、法的にはムスリムはイベリア半島には存在しない。『捕虜解放の旅』にも、数の誤りや事実の不正確さや誤認などは当然見受けられるが、この記述は単純な事実誤認ではないと考えられる。このような記述が暗示するのは、16世紀後半のアルプハラス反乱鎮圧直後の時期に

---

51) Al-Ghassānī 2005 : 98-99.

モロッコへ移住した人々（モリスコ）は、カトリックへの改宗を経験していないムスリムであり、かつ17世紀の全体追放時にマグリブへ移住したモリスコもまた、カトリックへ改宗していないムスリム、少なくとも自らの意思で改宗した者たちではない、という彼の主張である。

特にアルプハーラス反乱後にマグリブに移住したモリスコや、1609年以降にスペインから追放されたモリスコは、それまでの移住者と異なり、表面的にしろキリスト教徒としてキリスト教徒支配下に長く居住した者たちであり、マグリブのムスリムには棄教者あるいは信仰の不確かな者たちとして認識された。それゆえに、ガッサーニーは強制改宗が行われた時期を、意図的にずらし、17世紀の全体追放の際にも、カトリック信仰に改宗した者はスペインに残留したと述べることで、モロッコへ移住してきたモリスコたちは、棄教者などではなくムスリムであることを弁明しようとしたのではないだろうか。

#### 4 おわりに

ガッサーニーの『捕虜解放の旅』は、アラウィー朝モロッコとハプスブルク朝スペインの間の重要な外交案件であった戦争捕虜の解放と、アラビア語写本の返還という問題を解決するために派遣された使節の記録である。また、当時のムスリムの視点から17世紀末のスペイン社会がどのように認識されたのかを探る重要な史料であり、自らもアンダルス家系出身であるガッサーニーがアンダルスの過去をどのように記憶していたのかが表現されている。

『捕虜解放の旅』のなかで、ガッサーニーはスペインの村々の情景や社会制度、歴代の君主たちとその事跡、宗教行事など自らが見聞きした事柄について記録している。また、マドリードに集まるヨーロッパ各国大使からもたらされる情報によって、ヨーロッパ情勢の最新情報を可能な限り正確に伝えようとする姿勢が垣間見える。

ガッサーニーにとってこの旅は、外交交渉を行うためのものであると同時に、自らの父祖の土地を訪ね歩くという性格も有していた。それゆえに、アンダル

ス・ムスリムの歴史やモリスコ子孫についての描写には、当時マグリブに居住していた彼らの子孫たちとその事象の関係性がうかがえる。たとえば、実際は16世紀前半にムスリムに対して強制改宗が行われているにもかかわらず、16世紀後半のアルプハラス反乱失敗後にモリスコに対する強制改宗が行われたと述べ、かつ17世紀初頭の全体追放の際にも、カトリック信仰に改宗した者はスペインに残留したと明らかに事実と異なる内容を述べている。これは自身を含め、モロッコへの移住者やその子孫は、キリスト教へ改宗していない真正なムスリムであることを示唆し、その名誉を守るためでもあったと推測される。

また、『捕虜解放の旅』では、ガッサーニー一行がマドリードからモロッコへ向けて出立したのち、帰路にトレードへ立ち寄ったという記述で、17世紀末のスペインに関する記述は終わり、その後は8世紀初頭のイスラーム勢力によるアンダルス征服という歴史が語られる。このようにアンダルス征服の歴史について記述する、というのはガッサーニー独自の文体ではなく、実のところ、17世紀前半にアンダルス出身者がチュニスで記した著作にも見られる<sup>52)</sup>。失われたアンダルスの歴史を、自らの現在と突き合わせて、どのように解釈するのかは、マグリブに渡ったアンダルス出身者たちにとっての共通のテーマであったと考えられるが、これらのアンダルス表象の比較検討については今後の課題としたい。

【附記】本研究はJSPS 科研費（22K13234）による成果の一部である。

## 文献目録

### 【刊行史料】

- Al-Ghassānī, Muḥammad ibn ‘Abd al-Wahhāb al-Wazīr. 1884. *Voyage en Espagne d’un ambassadeur marocain (1690-1691)*, trans. H. Sauvaire, Paris.
- . 1940. *Viaje del visir para la liberación de los cautivos*, ed. and trans. A. Bustani, Larache: Publicaciones del Instituto General Franco para la Investigación Hispano-Árabe.

---

52) Aïssa et. al. 2017: 133.

- . 2002. *Riḥlat al-wazīr fī iftikāk al-asīr*, ed. Nūrī al-Jarrāḥ, Abū Zabī : Dār al-Suwaydī lil-Nashr wa-al-Tawzī’.
- . 2003. “The Journey of the minister to ransom the captive,” In *In the Lands of the Christians : Arabic Travel Writing in the 17th Century*, ed. and trans. N. Matar. New York and London : Routledge. pp. 113–95.
- . 2005. *Safīr Maghribī fī Madrīd fī Niḥāyat al-qarn Al-Sābi‘ ‘Ashr : Riḥlat al-Wazīr fī Iftikāk al-Asīr*, ed. ‘Abd al-Raḥīm Binḥāddah, Tokyo : Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Al-Ghazzāl, Aḥmad ibn al-Mahdī. 2017. *The Fruits of the Struggle in Diplomacy and War : Moroccan Ambassador Al-Ghazzāl and His Diplomatic Retinue in Eighteenth-Century Andalusia*. trans. Abdulrahman Al-Ruwaishan. ed. Travis Landry. Lanham, Maryland : Bucknell University Press.
- Al-Fishtālī, ‘Abd al-‘Azīz. 1972. *Manāhil al-Ṣafā’ fī Māthir Mawālīnā al-Shurafā’*, ed. ‘Abd al-Karīm Karīm. Rabaṭ : Maṭbū‘āt Wizārat al-Awqāf wa al-Shu‘ūn al-Islāmīya wa al-Thaqāfīya.
- Al-Qādirī, Muḥammad ibn al-Ṭayyib. 1977-1986. *Nashr al-Mathānī li-Ahl al-Qarn al-Hādīya ‘Ashar wa al-Thānīya*. ed. Muḥammad Ḥajjī, and Aḥmad al-Tawfīq. 4vols. Rabat : Maṭbū‘āt Dār al-Maghrib.

### 【研究文献】

- Aïssa, L., M. Aouini and H. E., Chachia, eds. and trans. 2017. *Entre las orillas de dos mundos : El itinerario del jerife morisco Muhammad ibn‘Abd al-Rafī : de Murcia a Túnez*. Murcia : Universidad de Murcia.
- Al-Saud, Abd al-Aziz. 2009. *La imagen de España en la historiografía marroquí de los siglos XVI, XVII, XVIII*. Al Khalji al-Arabi : Tetouan.
- Arribas Palau, Mariano. 1985. “De nuevo sobre la embajada de al-Gassani (1690-1691).” *Al-Qantara : Revista de estudios árabes* 6 (Fasc. 1–2) : 199–289.
- Baumi, Doaa. 2018. “Muḥammad ibn ‘Abd al-Wahhāb al-Ghassānī,” In *Christian Muslim Relations : A Bibliographical History, Asia, Africa and the Americas (1700-1800)*, eds. David Thomas, Barbara Roggema, Juan Pedro Monferrer Sala, et. al., vol. 12, Leiden : Brill, pp. 56–58.
- Beck, Lauren. 2015. “The travelogue of a Moroccan ambassador to Charles II, 1690-91 : the Seville MS.” *The Journal of North African Studies* 20(2) : 284–302.
- Bouchar, Mohamed Reda. 2018. “España vista por un embajador marroquí del siglo XVIII : Ibn ‘Uṭmān al-Maknāsī.” *Norba. Revista de Historia* 29–30 : 45–56.
- García-Arenal, Mercedes. 2009. *Ahmad al-Mansur The Beginnings of Modern Morocco*. Oxford : Oneworld Publications.

- García-Arenal, Mercedes, Fernando Rodríguez Mediano and Rachid El Hour. 2002. *Cartas marruecas : Documentos de Marruecos en archivos españoles (siglos XVI-XVII)*. Madrid : CSIC.
- Hermes, Nizar F. 2016. “Nostalgia for al-Andalus in early modern Moroccan *Voyages en Espagne* : al-Ghassānī’s Riḥlat al-wazīr fī iftikāk al-asīr (1690-91) as a case study.” *The Journal of North African Studies* 21(3) : 433-452.
- Kogelmann, Franz. 2002. “Sidi Fredj : A Case Study of a Religious Endowment in Morocco under the French Protectorate.” In *Social Welfare in Muslim Societies in Africa*, ed. Holger Weiss. Stockholm : Nordiska Afrikainstitutet, pp.66-78.
- Lewis, Bernard. 2001. *The Muslim discovery of Europe*. New York : W.W. Norton. (1st ed. 1982. バーナード・ルイス (尾高晋己訳) 2000-2001. 『ムスリムのヨーロッパ発見上・下』春風社)
- Matar, Nabil, ed. and trans. 2003a. *In the lands of the Christians. Arabic travel writing in the seventeenth century*. London : Routledge.
- . 2003b. “Al-Ghazal (c.1766) Moroccan Ambassador and Traveler.” In *Literature of Travel and Exploration : An Encyclopedia*, ed. Jennifer Speake. New York : Fitzroy Dearborn, pp.486-487.
- . 2009. *Europe through Arab Eyes, 1578-1727*. New York : Columbia University Press.
- . 2021. *Mediterranean captivity through Arab eyes, 1517-1798*. Leiden : Brill.
- Martín Corrales, Eloy. 2021. *Muslims in Spain, 1492-1814 : Living and Negotiating in the Land of the Infidel*. trans. Consuelo Lopez-Morillas, Leiden : Brill.
- Sánchez Ramos, Valeriano. 1995. “Los moriscos que ganaron la guerra.” In *Mélanges Louis Cardaillac*, ed. Abdeljelil Temimi, 2 vols, Zaghuan : Fondation Temimi pour la Recherche Scientifique et l’Information, vol. 2, pp.613-627.
- Stanley, H. E. J. 1868. “Account of an Embassy from Marocco [sic] to Spain in 1690 and 1691.” *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* 3 (2) : 359-378.
- Stearns, Justin. 2009. “Representing and Remembering al-Andalus : Some Historical Considerations Regarding the End of Time and the Making of Nostalgia.” *Medieval Encounters* 15 : 355-374.
- Wiegiers, G. A. 1996. “The Andalusī Heritage in the Maghrib : The Polemical Work of Muhammad Alguazir (fl. 1610).” In *Poetry, Politics and Polemics. Cultural Transfer between the Iberian Peninsula and North Africa*, eds. Ed de Moor, Otto Zwartjes, and Geert Jan van Gelder. Amsterdam : Rodopi, pp.107-32.
- Zhiri, Oumelbanine. 2016. “Mapping the Frontier between Islam and Christendom in a Diplomatic Age : al-Ghassānī in Spain.” *Renaissance Quarterly* 69 (3) : 966-999.
- 押尾高志 2021. 『「越境」する改宗者 モリスコの軌跡を追って』風響社。
- 金澤周作 2019. 「もうひとつの奴隷貿易 : 近世地中海における虜囚と身代金」『西洋史学』267号, 57-70頁。

- 坂本宏 2010. 「血の純潔規約に関する研究動向」『カルチュラル』4(1), 95-106 頁.
- 佐藤健太郎 2006. 「キリスト教徒征服後のグラナダと「隠れムスリム」の翻訳者（特集 アラブの都市と知識人）」『アジア遊学』no. 86, 79-91 頁.
- 同上 2014. 「17 世紀モリスコの旅行記 — ハジャリーのイスラーム再確認の旅」長谷部史彦編『地中海世界の旅人：移動と記述の中近世史』慶應義塾大学言語文化研究所, 2014 年, 25-54 頁.
- 同上 2016. 「17 世紀チェルシーのモリスコ」神崎忠昭編『断絶と新生 — 中近世ヨーロッパとイスラームの信仰・思想・統治』慶應義塾大学言語文化研究所, 233-260 頁.
- 末森晴賀 2021. 『ムスリム捕虜の語る近世の地中海：マルタの「海賊」とオスマン朝のはざままで』風響社.
- 濱本真実 2011. 『共生のイスラーム ロシア正教徒とムスリム』山川出版社.